
閉会の辞

藤澤 令夫

評価委員・京都大学名誉教授

2日間にわたる公開シンポジウムをふり返り、念頭に浮かぶことを若干申し述べて、閉会の辞とさせていただきます。

第1日の昨日は、開会の辞(中根)と総括班報告(中谷)に続いて、3つの研究報告が行われました。

関根氏の発表は、『サムエル記』『詩篇』の各一箇所のテキストに焦点を当てて、「歴史的解釈」と「哲学的解釈」との関係という、古典研究全般にとって普遍的な問題に踏みこんだ、興味ぶかい研究でした。金氏の研究は、大津皇子「臨終一絶」の出自と原形を、韓国・中国に伝わる幾つもの「臨刑詩」との比較考証によって探るといふ、私には一種スリリングな推理でした。そして後藤氏からは、「存在」の基本観念を表わすインドの「サツティア」とギリシア語の「ウーシアー」との突き合わせによって、両文化圏の思考のあり方の分岐を論じる意欲的な報告をうかがいました。

第2日目のきょうは、基調講演としてまず高崎氏が、18世紀から19世紀にかけて創始された西洋古典文献学の発展の大筋を跡づけつつ、それとの関連のもとにインド古典文献学の展開を顧みて、日本における状況にも目を配るなど、客観的な学問体系としての近代古典学の特色と意義について、バランスのとれた総合的展望へとわれわれを導かれました。つづく吉田氏の基調講演では、今日の新たな科学革命(と氏が考える)学問の動向における、「デザイン」「プログラム」といったキー・コンセプトを視座に置いて、「人文情報学」としての古典学の目的・対象・方法についての意欲的な提言が、氏独自の硬質の諸概念を駆使して展開されました。

引き続き、いわばこれらの基調講演の余韻の中で、「古典学への期待」をテーマとしたパネル・ディスカッションが行なわれ、各パネラーの有益な発言と、フ

ロアからの質問を受けた活発な討論のうちに、2日にわたる今日のシンポジウムを終えることができたのは、歓ばしいことでした。

第1日冒頭の中根氏の開会の辞は、新しい一般古典学の提唱はよいけれども、その方法も、またそもそも「古典とは何か」の定義も不明確ではないか、ときびしく指摘しましたが、これは本領域研究の対論でこれまで、くり返し取りあげられた問題です。今回の最後のパネル・ディスカッションでも、論議の対象となりました。会場のフロアから、「まず“古典”を厳密に定義しておかなければ研究をやっていけない、というのはおかしいのではないか」と質問が出ましたが、私も「古典」というのは固定的な閉じられた(closed)概念ではないはずで、「古典とは何か」も「何をもって古典とみなすか」ということも、作業仮設的に弛やかでオープンな規定を念頭に置きながら、研究と対論の進行の中で明確化して行くのが現実的ではないか、と考えています。

いま、科学と科学技術が地球上の各地域に伝播しつつ、しばしば各地域に固有の伝統文化とコンフリクトを起こしているのが見られます。通常、「科学」と「科学技術」はそのような伝播力のゆえに普遍的であり、これに対して「文化」は個別的であり特殊であるというように、性格づけられています。しかし、価値の観点からみると、科学と科学技術が体現する価値とは、人間の生物的生存と行動の直接的な有効化　つまり効率性　という、人間にとってのさまざまな価値のなかの一つとしての単一の価値であるのに対して、「文化」は、いずれの地域の文化も、その基層は人間の「よく生きること」への願望であり、人間にとってのトータルな価値を志向するものであります。

現在、もともとは「文化」の一部として包みこまれているはずの「科学」「科学技術」が突出して、その恩恵の反面、自然環境や人間の心性に及ぼす負の波及効果が顕著であるにもかかわらず、ますます加速度を増しつつ独走する情勢にあります。これをもう一度、「文化」の基層をなす「よく生きる」という人間の本来的なモチーフの中へ組みこんで、とらえ直すように努めること、ここに疑いもなく、今日われわれに求められる基本的かつ緊急の課題があると思います。

そして「古典」とは、それをどう定義するかにかかわらずなく、「文化」の最古層の母胎であり中核であるという事実は動かないはずです。その意味で、古典学の存在意義と果すべき役割は、今日、きわめて重たいといわなければなりません。その拠点となる「古典学研究所」の設立が切望されるゆえんであります。

ただ、厳しい現実的な諸問題（お金や人のこと）に直面するとき、その実現に向けての推進には二の足を踏みたくもなるわけですが、しかし他方で、ニュートリノに質量があるかないかを確認するための（あるに決まっている！）「スーパー・カミオカンデ」（岐阜県神岡町の地下1000メートルに設けられた、つくばから

の250キロのトンネルの端にある観測装置）のような巨大施設のために、気の遠くなるような巨額の国家予算（国民の税金）が注ぎ込まれているのを見ると、人間にとってのこの混迷した状況の中での、何という危険なアンバランスか、と憂慮せざるをえません。

最後に、今回研究報告と基調講演をしていただいた方々、パネル・ディスカッションでの司会者としてまたパネラーとして、あるいはフロアから稔りある発言をしてくださった方々に、そして今回のシンポジウムの運営・進行のすべてを取り仕切っていただいた事務局担当の方々に、心から敬意と感謝の意を表しまして、私の閉会の辞とさせていただきます。

